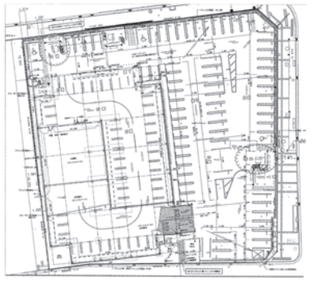
出来事ファイル (№22－3)

■自転車乗り入れ禁止道路

元町商店街は、自転車乗り入れ禁止地域である。場所によっては自転車に乗ったまま走行する例がみられることから、元町商店街では、このほど男女が自転車を押して商店街を散策する姿を描いた看板「いつも押してくれてありがとう」を制作、2月中旬、全丁に配置した。

■ＧＳパーク完成・開業へ

栄町通と乙仲通東の入り口で、銀泉㈱が展開する「ＧＳパーク神戸立駐プロジェクト」は路面に左折退場の矢印設置の工事も終え、再開業の運びとなった。収容台数は、青空で７０台、立駐内１９１台、あわせて２６１台となっている。


ＧＳパーク全体図

■クリーン作戦レポート

２月２日(水)、もとまちハーバー懇談会では例月のクリーン作戦を実施した。当日はエスタシオン・デ・神戸、ベルコ㈱、ホテルＪＵＲＡＫＵが参加、ネッツトヨタ兵庫㈱は、コロナまん延防止法適用による人員不足のため、実施できなかった。

□読者プレゼント 兵馬俑と古代中国～秦漢文明の遺産

秦漢両帝国の中心地域である関中(現在の陝西省)の出土品を中心に、日本初出の一級文物(最高級の貴重文物を指す中国独自の区分)を含めた約200点を展示。戦国時代の極小の騎馬俑が、なぜ始皇帝陵の等身大の兵馬俑となり、また漢代皇帝陵ではなぜ小さな兵馬俑になったのか、歴史の不思議を実感していただけます。

観覧ご希望の方は、展覧会名・住所・氏名・年齢・本紙へのひと言を添え、本紙編集部までハガキでお申込み下さい。先着順で２名の方に、ペア招待券をお送りします。

会期：２０２２年３月２５日(金)
～５月２２日(日)
会場：京都市京セラ美術館

神戸元町商店街 楽市楽座情報 3月

◇こうべまちづくり会館ギャラリー(無料)　℡361－4523

3月　3日(木)～3月　8日(火)
竹田眞・永田収合同作品展「神戸残像5」は12月8日(木)～12月13日(火)に開催延期
3月10日(木)～3月15日(火)
神戸2021 倉掛喜八郎展
3月17日(木)～3月22日(火)
第17回 回転ドアの仲間たち・油絵展
3月24日(木)～3月29日(火)
2022, フォト神戸　写真展
3月31日(木)～4月　5日(火)
第7回 透明水彩画教室の仲間展

◇元町映画館(有料)　℡366－2636

2月19日(土)～3月　4日(金)　『東洋の魔女』
2月26日(土)～3月　4日(金)　『かば』
2月26日(土)～3月11日(金)
『チェチェンへようこそ ―ゲイの粛清―』
特集「タル・ベーラ伝説前夜」
3月　5日(土)～3月11日(金)
濱口竜介監督特集上映「言葉と乗り物」
3月　5日(土)～3月18日(金)　『エル プラネタ』
3月12日(土)～3月18日(金)
『グンダーマン 優しき裏切り者の歌』
『ハイゼ家百年』
3月12日(土)～4月　1日(金)　『三度目の、正直』
3月19日(土)～4月　1日(金)
『リング・ワンダリング』
『麻希のいる世界』
『猫は逃げた』・『愛なのに』
3月26日(土)～4月　1日(金)　『虹が落ちる前に』
【予定は変更になる場合がございます。】

栄町通クリーン作戦

栄町通まちづくり委員会は、２月18日(金)10時から10時30分まで、栄町通を中心に、ゴミ拾いと不法ビラ撤去、自転車・バイクなどへの不法駐輪警告チラシ取り付け作業など、栄町通クリーン大作戦を実施した。参加者は、(元栄海三丁目協和会)奈良山喬一、(株式会社ＫＫテクノ)加藤利貞・松本美紀、(こうべまちづくり会館)木原正剛、(佐野運輸)北島幸宏・末松明、(㈱神明)梅原直子、(神明倉庫㈱)藤尾憲弘・大西登記子、(三鈴マシナリー㈱)田中梨沙、(新光明飾㈱)藤田直之・西村友博・大森貴美子、(佐田野不動産㈱)佐田野宏之以上、14名のみなさんでした。毎月第２金曜日午前10時、栄町通６丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。

編集後記

協議会の対象地域は、元町通・栄町通・海岸通。その地名が生まれたのは明治７年５月20日、神戸市が誕生する前の、兵庫県の時代だ。神戸市が発足しても、町名はそのまま引き継がれ現在に至っている。海岸通を除き、元町と栄町は、早い時代から、全国あちこちの町々で採用されたなじみの名前だ。はじまりを意味する「元町」通、まちの経済的な力を歌い上げてきた「栄町」通。全国のあちこちで、人口と富を集めるまち中心地の代表的な地名として、今もその名を語り継いでいきた。全国に散らばる中心市街地を謳歌してきた「元町」「栄町」が地盤地下するなか、神戸では阪神大震災を機にまちは一新。現在、人口増加を防ぐための知恵が求められる地域になっている。

みなと元町タウンニュース
TOWN NEWS
発　行:みなと元町タウン協議会　住　所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内　発行人:奈良山喬一　編集人:岩田照彦　電話・FAX:078－391－0831

まちで活動する、まちを楽しむ人たちの活動拠点「まち活拠点まちラボ」

特定非営利活動法人　神戸まちづくり研究所　山岸千夏

2019年10月1日に元町商店街4丁目にある「こうべまちづくり会館」4階にオープンした「まちラボ」は、まちづくり活動をする人たちの拠点として、会議や作業場所の提供、図書・資料の貸出、相談業務、まちに興味を持ってもらうようなイベント企画実施などを行っています。

「まちラボ」ってどんな場所？何ができるの？

まちラボの運営は、神戸市より特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所が受託しており、施設の機能は大きく2つです。

1.誰でも使えるコミュニティスペース
・会議、図書の閲覧、パソコン作業など自由に使えるスペースです。コンセント、フリーWi-Fiも整備していますので、オンライン会議やセミナー・イベントの実施もできます。
・カフェコーナー、ラウンジがあり、飲食もできます。ちょっとした休憩や飲食関連イベントもできます。
・地域やまちづくりに関連する図書・資料が約1万冊あり、一部を除いて貸出可能です。毎月更新、オススメ本紹介などもしており、いろんな視点でまちを知るきっかけを掴んでいただけます。
・動画撮影、配信に必要な機材一式をそろえています。登録していただくとご利用いただけます。
・こうべまちづくり会館5階には、有料のブース型ワークスペースもあります。(別途利用契約が必要)
詳しくは、まちラボルームツアー動画を公開していますので、そちらをご覧ください。
https://youtu.be/fiGzavEZjj4

2.まちに興味をもってもらう企画や
まちづくり活動の相談窓口
・まちづくり活動をしている人達への情報発信として、情報冊子を集めています。また、神戸市のまちづくり公式情報を知るセミナーなども実施しています。
・まちづくり相談所として、地域活動に関することや、まちづくりに関する論文作成の資料探しやエスキスの相談などにも対応しています。
・地域と連携した事業も行っています。令和2年度からは、元町商店街の活性化に取り組む「考える人」の活動拠点として活用されています。
・いわゆる「まちづくり」の枠にこだわらない活動から地域を知る、楽しむための企画もいろいろと実施しています。令和3年度は「神戸インク物語」を軸にまちあるき、お絵かき、絵本作りなどのワークショップを企画しました。今後も楽しい視点でまちを捉えていこうと思っています。

まちラボが思う「まちづくり」とは

一言で「まちづくり」と言っても、それが何を指すのか明確に説明できる人は少ないと思います。

「あなたにとってのまちづくりとは何ですか？」という問いかけには、10人いれば10通りの答えがあるような言葉ではないでしょうか？

私たちが目指すものは、その人にとっての「やりたい事、取り組みたいこと」を見つけて、必要なことを学び、情報を集め、仲間とつながることのできる場を運営することです。

そして、「やりたい事、取り組みたい事」がいずれ「まちの魅力」となること。結果的にそれが「まちづくり」となればいいなと思います。

まちラボのこれから

運営開始から2年を経過し、「誰でも使えるコミュニティスペース」として少しずつ認知されているように思います。利用者目線での施設整備が完了し、これからは、ここでどんな活動が生まれるかという段階に入りました。まちラボを利用する方が、「まちづくり」を知ることと同時に、ご自分にとっての「まち」や「興味のあること」をアウトプットできる場でありたいと思います。

今まで通り、この場所をたくさんの人に使ってもらえるような取り組みを行いながら、まちに興味を持ち、好きになってもらえるような企画や、専門性のあるセミナーの実施など、やりたいことは沢山あります。まちづくりに関わる市民、専門家、行政といった「協働と参画」のキーとなる人たちにとっての「居場所」「よりどころ」となるのが最終目標です。

具体的な取り組みは、次回以降にお知らせできればと思います。

海という名の本屋が消えた（100）

平野義昌

元町駅周辺(6)　学校その6

神戸近現代史を語るうえでキリスト教団の存在は欠かせない。明治新政府は江戸幕府の「キリスト教禁制」を継承、日本人信徒を弾圧した。国際的な批難を受け、禁を解くのは1873(明治6)年2月のこと。伝道者たちは自国民の礼拝と冠婚葬祭儀式の傍ら、地道な活動を始めた。新興都市・神戸に多くの人が当てもなく職を求めて集まる。社会資本が整備される前に、貧困問題が顕在する。

1868(慶応4)年5月、カトリック司祭・ムニクー(フランス人)が神戸に着任。同(明治元)年秋、居留地に土地を得た。70(明治3)年4月大工事の末、三宮教会(聖母の七つの悲しみ教会)が完成(1923年中山手通に移転し中山手カトリック教会)。72(明治5)年、凶作と不況の影響で町に捨て子が増加。ムニクーの後任、アマトス・ヴィリオン神父が教会で子どもたちの面倒を見た。既に横浜で修道女たちが孤児院を開いていたので引き取ってもらう。10ヵ月で65人を船に乗せた。横浜のプチジャン司祭に神戸にも修道女派遣を依頼したところ、77(明治10)年、フランス「幼きイエズス修道会」の修道女4人が到着。教会に「女子教育院」＝「真光女学校」を設立した(補註1)。彼らの献身的活動が市民の理解を得て、教会参加者が増える。78(明治11)年1月、孤児含め82名が受洗した。同年夏コレラ流行、患者救済にも当たった。89(明治22)年、教育院は「真光女学校」の付属施設になり、孤児に普通教育、一般女子に語学と手芸を教えた。90(明治23)年、岡山から修道女ヒロメナ・ワランチン・アントニン(86年来日、数ヵ月神戸で活動)が赴任。神戸の人口はますます増え、貧困者も増加、教会の孤児は20人超。アントニンは日常の買い物に苦労したが、多忙の中、神戸弁を習得して市民生活にとけ込んだ。児童保育だけではなく、女性保護のため教育の力が必要と、子どもたちを幼稚園・小学校に通わせ、裁縫を教え、成績優良者は女学校に進学させた。卒業後も相談に応じた。居留地はビジネス街となったため、下山手通7丁目に施設一部を移転した。ここに「聖家族幼稚園」を設立し、昼夜幼児を保育。乳児と小学生以上は居留地の教育院に分離となった。99(明治32)年、外国人子女教育「聖マリア女学校」設立。1914(大正3)年、教育院を幼稚園内に移設した。

「真光女学校」は1924(大正13)年幼稚園隣に移転して「神戸女子和洋技芸学校」に、26(大正15)年「聖家族女学校」に、36(昭和10)年「聖家族高等女学校」に改称した。45(昭和20)年、同校は空襲で焼失。子どもたちは京都の教育院に委ねられた。46(昭和21)年、「マリア宣教者フランシスコ修道会」が女学校を継承し「海星高等女学校」。現在の「神戸海星女子学院」である。補註2

プロテスタントでは、1870(明治3)年3月に海外布教団体・アメリカンボードの宣教師ダニエル・クロスビー・グリーンが来神。雑居地・中宮村(現在山本通)の家から居留地の集会所に通った。71(明治4)年6月、グリーンの通訳・雑用係の市川榮之助・まつ夫妻がキリスト教禁制を理由に逮捕された。グリーンは直接・間接に日本政府に抗議したが、72(明治5)年11月京都の獄舎で榮之助病死(まつ釈放)。この事件も国際社会から宗教弾圧と批難された。同年同月、居留地在住のイギリス人が家屋を提供し、教会ができた。現在のユニオン教会の前身である。同年12月、宇治野村でグリーンは英語学校を開き、旧三田藩士・前田泰一他青年たちが学ぶ。73年キリシタン禁制が解かれると、前田らは市場町(現在元町通5丁目)に書店と聖書講義所を開設、「摂津第一神戸公会」(のち神戸基督教会、現在日本基督教団神戸教会)となる。74(明治7)年4月、前田ら三田藩関係者、松山高吉(のち神戸教会牧師)他11名が受洗、市川まつもいた。同年グリーンと信徒らは日本語讃美歌集、通称『神戸版無題讃美歌集』を刊行。73年春、女性宣教師ジュリア・ダッドレーとエリザ・タルカット来神。共に教師経験があり、旧三田藩主・九鬼隆義の依頼を受け、花隈で英語と音楽を教える塾を開いた。「神戸女学院」の母胎である。

1886(明治19)年、神戸基督教会婦人会(三田藩関係者、女学院OGら)が幼稚園創立を提案し、資金づくりを開始。3銭ずつ出し京都から人形を仕入れ、手縫いの着物を着せて雛人形を作った。また先祖伝来の骨董品を寄付。これらを宣教師に託し、ニューヨークの教会婦人会に販売してもらった。人形は「ミカド人形」と好評を得た。会員は別に1銭以上ずつ積み立て、すぐ資金千円に到達した。87(明治20)年、幼児教育者・宣教師、アニー・L・ハウが来日。89(明治22)年「頌栄保姆伝習所」(現在頌栄短期大学)と「頌栄幼稚園」を開設した。敷地は中山手通の旧三田藩家老・白洲退蔵所有地。伝習所12名入学。幼稚園は定員50名満員になり、翌年増築、定員60名に増員した。92(明治25)年、ハウは「幼稚園唱歌」(福音社)を出版。翻訳は松山と大和田建樹(国文学者・詩人、「鉄道唱歌」「故郷の空」など作詞)。ハウはドイツの教育学者フリードリヒ・ウイルヘルム・アウグスト・フレーベル(1782～1852年)の思想・文献を紹介、導入した。信仰に加え、母子の遊び、自然観察、想像力養成、音楽、教材(玩具)、良い生活習慣などを特色とした。

76(明治9)年、イギリス国教会を源流とする聖公会の宣教師ヒュー・ジェイムス・フォスが神戸着任。78(明治11)年、栄町通4丁目に「乾行(けんこう)義塾」を開校し、英語・漢学・数学を教えた。翌年鯉川筋に移転。生徒数は150名を超え、日曜日に校舎で礼拝を行った。81(明治14)年、聖ミカエル教会設立(89年中山手通3丁目移転)。

「乾行義塾」に憲法学者・美濃部達吉(1873～1948年)が在学した。達吉は加古郡高砂町(現在高砂市)生まれ。正規の年齢より早く小学校に入学したうえ、成績優秀で飛び級した。地元の中学校が廃校になり、85(明治18)年12歳で「乾行」に入学している。

〈……神戸の県立医院に勤めていた義兄の手許に預けられ、十五の歳までそこで世話になって、乾行義塾という英語と漢学と数学だけを教える私立学校に通学していた。ヒュースという若い英国人が校長で、校長夫妻とケンブリッジ大学を出たばかりのガードナーという若い教師とで、主に英語を教えていた。毎日午前中は全部が英語の時間で、地理や歴史も其の間に教えられた。(後略)〉註1

1887(明治20)年達吉上京。予備校から第一高等中学校に進学する。順風満帆に見えるが、留年あり、腸チフス療養あり。帝国大学法科大学入学は94(明治27)年だった。「天皇機関説」排撃事件は昭和のこと。

1892(明治25)年、フォスは女性海外伝道団体の支援を受け「松蔭女学校」を設立(写真)。英語、算術、読書、裁縫を教えた。校舎は山本通1丁目(現在北野町1丁目)の九鬼宅を借りた。明治の間に中山手通内で2度移転。1925(大正14)年制服制定。29(昭和4)年灘区に校舎移転。戦前の同校OGを主人公にした小説が学校の様子を伝える。校名は「松楓」に変えている。英語略称「SMS」は「松蔭ミッションスクール」。〈斜面の上の新しい木造の本館は堂々とした造りで窓が大きい。窓枠は緑色のペンキで塗られ、摩耶山の松とよく調和している。(略)十月一日は衣替えだ。冬の制服は白い平襟がついた濃紺のワンピースで清楚な感じだ。スタイルは夏冬まったく同じだけれど、軽やかな夏服と違って冬服は落ち着いている。胸にはSMSを組み合わせた校章が赤い糸で刺繍され、生地は英国製のサージだ。(略)クリスチャンの良妻賢母になるように徹底的に英国的な教育が行われていた。十年前に今の校長先生になって伝統的な校風のうえに日本的なものも取り入れたそうだ。(略)他の女学校と同じような料理、洋裁、家庭経営などの科目に加えて、松楓ではベッドメーキング、テーブルセッティング、テーブルマナーなど英国の主婦が学ぶべきものが教え込まれた。五年生になってからは一週間ずつ宣教師館に泊まり込んで、家事実習をする時間もあった。〉註2

現在も更衣の季節には同校制服が新聞を飾る。小磯良平が「斉唱」(1941年)に描いた制服だ。

写真　「神戸又新日報」明治25年8月21日「松蔭女学校募集広告」(『幕末から明治にかけての神戸の教育　その2　「神戸又新日報」の教育に関する新聞記事』大崎正勝他編・発行)

註1　美濃部達吉「大学に入るまで」(鈴木利貞編『学生と教養』日本評論社1936年)

註2　大西明子『神戸モダンの女』編集工房ノア2019年

その他参考文献
『神戸と聖書　神戸・阪神間の450年の歩み』 同編集委員会編　神戸新聞総合出版センター　2001年
吉野丈夫『神戸と基督教』 神戸伝道100年史刊行会　1975年

『神戸海星女子学院　短期大学創立30周年　大学創立20周年記念誌』 神戸海星女子学院大学・短期大学編・発行　1985年

小林恵子『日本の幼児保育につくした宣教師　下巻』 キリスト新聞社　2009年
田代菊雄『日本カトリック社会事業史研究』 法律文化社　1989年

補註1　孤児院は当初「センタンファンス」と命名された。「Saints enfants」＝「聖なる子どもたち」。収容児童は1ヵ月で8名、3ヵ月後35名に。年末56名になるが、麻疹が流行し5名死亡。

補註2　「真光女学校」。資料よって漢字「神光」「進光」あり。海星女子学院資料では、戦時中の校名は「中山手女子商業学校」、45年10月授業を再開したが、長崎の教会本部原爆被災(修道女7人死亡)の影響大きく、学校再建を断念。

みなとMOTOMACHIケンチクさんぽ vol.8

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部 兵庫地域会　地域まちづくり委員会

元町my History　街は記憶とともに・・・

私は神戸で生まれ育ち、昭和57年から平成10年迄の16年間東京で暮らした以外、60年近い人生の約4分の3を神戸で暮らしてきました。阪神淡路大震災は経験していませんが、震災前の神戸の風景も記憶の片隅にしっかり残っています。平成15年からは三宮町三丁目内のビル3階で自分の事務所を構えており、平成20年に下山手通五丁目に垂水区から引越してからは、この界隈が益々身近になり日常生活を過す風景の一部となりました。

せっかくの機会ですので、今では商店街にないお店も含めて、私なりの思い出を少し綴ってみたいと思います。神戸に戻ってきた頃は、まだどのお店もあったと思いますが、まず幼少時によく訪れた不二家のレストラン、母がここなら揃う学習教材を買って来てくれた元町宝文館、友人の出産祝いでいつも利用した子供服の定番ファミリア本店、最終閉店セールで独LAMY社の万年筆を手に入れた丸善、小学4年生の時トランペットを買ってもらったヤマハ楽器、大人になってもピアノの楽譜を時々探しに行っていました。いずれのお店も元町商店街を語るには、私にとって欠かせない存在でしたが、この20年余で姿を消してしまいました。本当に寂しい限りです。

今でもあるお店. . 退職していったスタッフがスパゲティを食べに行きたいと言っていた珈琲店サントス。高校生の頃、悪友仲間と上階で煙草くゆらせてアーケード街を眺めていたっけ。五丁目人形材料屋さん栄屋亡きご店主は、中学高校6年間の担任松尾煌一先生。90代半ばで亡くなられるまで同級生数名と連れ立ってよく遊びに行きました。目が見えなくなられた晩年もいつも我々を快く迎えてくださり、昔話に花を咲かせました。帰りに食べて行けとご馳走してくださった洋食屋さんのグリルミヤコのビーフシチューは、今では私の鉄板メニューの一つです。最近は、休日に息子と二人で洋食屋QUATTROや鶏Soba座銀に並んで食べに行っています。どちらもいつも行列のできる人気店ですが、自閉症の息子はお気に入りメニューを食べると言って他へ行くことを聞き入れません。

10年ほど前、先のスタッフN君が在籍していた頃、二人でダイエットを目的に商店街のお店が閉まり終えた頃を見計らって、夜にジョギングをしていました。片道約1.2Kmの道のりで、栄町通と中央幹線を使って八の字を描いて走ると丁度約５Km程の距離となり、いい汗をかいていました。夜9時を過ぎると五丁目以西のアーケード照明は落ち、薄暗い中を走っていました。今は膝が痛くてもう走れませんが. .（苦笑）そんなこんなで私の日常は、結構元町という街と共にあります。

十代の頃は、どちらかというと途中下車しても三宮界隈の繁華街をうろついていましたが、元町側に暮らしてみて気づいたことがあります。元町界隈の街は、JRを超えて北に上るととても静かな住宅街があり、落ち着いた暮らしが意外と身近にあることでしょうか。兵庫県警が近いからか、表立って騒ぐ人も居ません。又地元小中学校にも繁華街を通らず通学ルートが確保できるし、子供達にも便利な街です。三宮側にはない、どちらかというと家庭的な雰囲気の食堂や喫茶店が多いのも合点がいきます。これだけの繁華街と静かな住宅街が、身近な距離で同居している街は、全国的にみても珍しいのではないかと思っています。唯、商店街にかつての大きな賑いがないのは、誰もが感じている事でしょうか。

恩師の故松尾煌一先生を囲んで（栄屋）

記憶を紡いでくれる元町界隈のお店たち

70年余の歴史でも元町Storyの半分(大上鞄店)

元町 Another Story　人の居る風景がコミュニティを創り、「場所」が人々の記憶を紡いでいく

2000年代に入って、何が大きく変わったと言えば、誰も異論を挟む余地なくスマホの普及とネット社会の到来でしょう。ポチッとボタン一つで物が買える時代です。もはや、小売の商売をするには何か購買行為とは違った体験を積んでもらえないとお店に来てまでワザワザ品物を買ってくれません。昭和世代の私たちは、ウィンドーショッピングやお店の人との会話を楽しみながら買い物をしたものですが、今は唯商品を買うだけでしたら、街に出てくる必要すらないのです。時代とは流れて後戻りをしない代物です。

私が建築を学ぶ若者達に伝えていることとして、建築は「居場所(Place)」をつくることであって、単なる「空間(Space)」だけあってもダメで、「振舞い(Play)」を伴なわなければ、その存在意義を勝ち取れないと言っているのですが、まさに街での記憶もなにかしらの体験に基づいて積み重ねられていると言えるでしょう。そこに大きなヒントがあると思います。何が生み出せるかは、皆で知恵を絞るしかないと思います。雨の日、元町商店街で傘を買い求めたお客さんは、商店街で飲食すればポイントがたまるとか、もうないですが、ファミリアの服を着たお子さんは、子供料金として半額にするとか、お店同士が、いや商店街全体がコラボレーションする仕掛けを今まで以上に模索すれば、神戸元町商店街は面白い、楽しい、一日に何度でも訪れる価値がある街になるのではないかと、勝手に妄想しています。間口1.2Kmの二倍の距離を持つ巨大な一つの商店と考えれば、百貨店やイオンモールに対抗できる、アマゾン・楽天では体験できない歩行者空間からなる、商空間が生まれるのではないでしょうか。

今回のエッセーを執筆するにあたり、元町商店街連合会発行の「神戸の良さが元町に」を読ませていただきました。私の母方の祖父は、大正から戦時中まで元町通一丁目で商売をしておりました。スズラン灯設置時の店主にも「和洋酒類」と「西洋料理」の二項目で名前が掲載されていました。小麦粉配給を行っていた食糧営団理事長に戦前就いていたと今96歳になる母から伝え聞いています。私が生まれる9年前に没した祖父瀧本登一の名前を発見できて、とても嬉しかったです。昨年新装された大上鞄店様は私のデザイン担当です。これも何かのご縁でしょうか。多謝

八木 康行（やぎ やすゆき）
ステュディオエイトアーキテクト
代表　一級建築士　関西大学非常勤講師
(公社)日本建築家協会フェロー会員
(公社)日本建築家協会近畿地域会会長